子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2013年5月　NO.173

[もくじ]

2～ 3　高知にありがとう。…扇谷ちさと

4～ 5　第8回美術作品コンクールの審査にあたって
何のために絵を描いているのか？…片岡真実

6～ 7　蓮の音コンサートを終えて…山崎美佐子

8～ 9　第23回高知出版学術賞を審査して…中内光昭

10～11　言葉の現場から39「鉄鉢の中へも霰」のなぞ…広井護

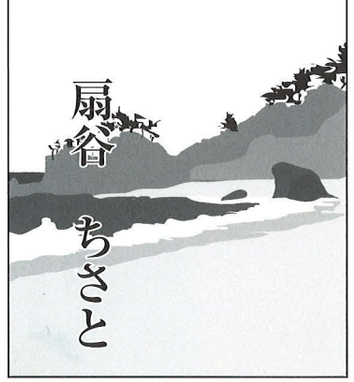
12～13　高知市文化振興事業団2月～3月の事業から

14～15　風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：「梅の実」黒岩亜美

公益財団法人高知市文化振興事業団

高知にありがとう。



高知を離れてはや二十二年が経ちましたが、よさこいとの縁はますます深まるばかりです。これまでよさこいがいかに私の人生に大いに影響を与えたのか、少しお話いたします。

◆原点、よさこい祭りとの出会い

よさこいを初めて踊ったのは幼少のとき、当時地元であった市内商店街の会場で暑い真夏の中で参加したのが、記憶の片隅に残っています。

そして十六歳のときに友人の誘いで入門したジャズダンススタジオで踊りの楽しさにはまったことが、よさこいを続ける長い道のりのスタートとなったのです。

二十一歳のときに、自分でよさこいチームを結成。多くの仲間に支えられ八年間出場いたしました。

◆東京・首都圏で高知のよさこいを普及

その後、東京に上京し、ダンスインストラクターなどを経てしばらくよさこいから遠ざかりましたが、一九九〇年代末から再び関わることになったのです。

当時、北海道でブームとも言えるほど爆発的に広がっていたＹＯＳＡＫＯＩソーランが、関東でもマスコミに紹介されるなどその足音が少しずつ聞こえてきました。

当時はそんなブームにいささか違和感を覚え、気になっていました。

そんな中、偶然東京でよさこいチームで活動する人と出会い、振付を頼まれました。私でお役に立つならと思い引き受けました。それをきっかけに本腰を入れて、よさこいを首都圏で普及するためのチーム「ＴＯＫＹＯ夜さ来いＣＯＭＰＡＮＹ」を設立しました。この頃は東京では大きなよさこい系の祭りは全く存在せず、高知のよさこいの魅力をただ愚直に伝えようとあちらこちらの祭りやイベントに出演しました。

◆「ドリーム夜さ来い祭り」の創設へ

普及活動や祭りプロデュースを手掛ける中で、思い切って祭りを立ち上げようと決意し、「東京から日本の夢を世界に発信」を理念にドリーム夜さ来い祭りを創設しました。

場所は祭りの空白地域であり、しがらみの少ない新しいまちづくりが展開されていたお台場にしました。

組織づくりも手作りでゼロからの出発。これまでお世話になった首都圏で活動する祭り主催者や主要チームに声をかけ、お台場のまちづくり企業との共催を目標としました。

ところが総論賛成・各論反対で、協賛集めには当初苦戦しました。世は、失われた十年とＩＴバブルの崩壊で景気のどん底でした。そ

ドリーム夜さ来い祭り

んな中で、初年度は様子見の企業がほとんどでした。

以後、昨年の開催で十一回目を迎え、会場もお台場だけでなく、丸の内・有楽町にまで拡大し、観客五十万人を超える東京の顔となる新しい祭りとして変化しつつあります。

◆ドリーム夜さ来い祭りＩＮニューヨークの開催へ

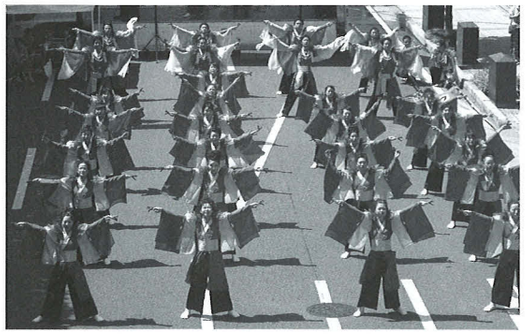
よさこいとニューヨークとは直接関係はありません。でも、ドリーム夜さ来い祭りの開催地・東京の姉妹都市であることや、自由の女神を擁しているまち同士であることなどが実現につながる縁と信じて、そっと胸に秘めておりました。まず創設から十年間はお台場で祭りを定着させることが最優先と考えていました。

ＮＹタイムズスクエア

時は流れ、お台場で十回目を終えた昨年春に視察を兼ね、初めてニューヨークに降り立ちました。その中心地のタイムズスクエア（別称：世界の交差点ともいうそうです）の何とも言えない華やかさを見て、ここでやるしかないと決断しました。その後、この一年間の準備を通じて、多くの方々に助けられて、何とか今年四月二十八日の開催にまでこぎつけることができました。

◆よさこいへの思い

私たち実行委員会では、ドリーム夜さ来いオフィシャルチームという祭り公式チームで毎年よさこい祭り（全国大会）に出場しております。私個人にとってはある意味里帰りを兼ねて、高知でお世話になった方々に東京で元気でやっておりますこと、そして御礼を伝える機会でもあります。


ドリーム夜さ来いオフィシャルチーム

高知で始まって今年で六十年を迎えるよさこい。

たくさんの方々にもっと高知に足を運んでいただきたいです。踊っている方には何よりも高知のよさこい祭りで踊れる喜びを、踊っていない方にはぜひ観に来ていただき、熱いよさこいを感じてほしいと思っています。

まだまだよさこいを知らない、名前を聞いたことはあるけれど観たことがない、そのような方々に一人でも多く高知のよさこいを伝えていきたいのです。

夢は大きく世界中の誰もが知っている、そんなよさこいになってくれたらいいなと願っています。

故郷高知に、よさこいに感謝と敬意を心の中に刻み、これからも歩んでいきます。

そして一番は土佐人に生まれて良かった！高知にありがとう。

せんたに　ちさと

一九六二年　高知市出身

二〇〇二年の創設時よりドリーム夜さ来い祭り実行委員長・首都圏夜さ来い祭り振興協議会会長を務める。現在も首都圏のよさこいチームのプロデュース・よさこい鳴子踊り振付講師・首都圏の祭り普及・ＴＶやセレモニー・ＭＩＣＥ関連の催事での出演など、活動は多岐にわたる。二〇一三年、ＴＯＫＹＯ夜さ来いＣＯＭＰＡＮＹ会長就任。高知県観光特使。

●第8回美術作品コンクールの審査にあたって——

何のために絵を描いているのか？

片岡　真実

「第8回美術作品コンクール」の審査にあたり、改めて絵を描くことの根源的な意味を考えさせられた。実際、今日の国際的な美術の潮流では、表現の方法は絵画という平面表現に限られているわけではなく、立体、映像、空間表現などの多様なメディアを横断して表現している者も少なくない。言い換えれば、表現したいものが先にあり、それを視覚化させるために最も適した方法を適宜採用するという考え方だ。そこでは「何のために絵を描いているのか？」、「なぜ絵画なのか」が自ずと問われてくる。

東日本大震災と福島原発事故を経て、多くのアーティストやクリエイターが未曾有の事態におけるその無力さを実感した。少なくとも、自分の仕事や専門性の延長線上でどのような役割が担えるかを多くの人が考えたはずだ。被災地でのボランティアなど、美術を離れた緊急時の支援という関わりから二年を経た今日、改めて芸術には何かできることがあるのだろうか。その心の底からの問いを、本来であればクリエイターは常に自身の内部へ問い掛けているべきであると考えている。

さらに、欧米、アジアだけではなく、ラテンアメリカ、アフリカ、北欧、東欧など世界のあらゆる地域で新しい芸術が創出され、また各地域における「近代」の意味が再検証されている今日、この大きな地球上で、あるいは人類の歴史のなかで、「いったい自分はどこにいるのか？」、「自分はどこから来たのか？」という、歴史的、地政学的な存在論を問わざるを得ない。

同時に、グローバルな情報が多様なコミュニケーションメディアを通して入手できる今日、文化や言語、社会環境を越えて心の底から人々の感情を揺り動かすリアルな体験とは一体何なのか？ 視覚から得た情報がいかに他者のリアルな体験へと転換されるのか？ 絵を描くことの根底で自身を突き動かしているのは何なのか？ 自分だけのために絵を描いているのではなく、「発表する」、つまり自分の衝動を他者と共有したいと考えるのであれば、これらの問いは当然考慮されるべきものではないだろうか。

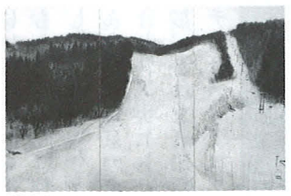
一万五千年前、ラスコー洞窟に壁画が描かれたような狩猟時代には、絵画には人間よりも神に近い生き物としての動物を介した呪術的意図があったと考えられている。フランスの哲学者ジョルジュ・バタイユは、『ラスコーの壁画』（ジョルジュ・バタイユ著作集、二見書房、一九七五年）において「それらの絵は奇蹟の産物として私たちの眼前にあり、私たちのなかに烈しい内密の感動を呼び覚ます。しかし、実はその分だけ、いっそうそれらは理解不能なものだ」という。そして、そのラスコーの奇蹟とは「若き人類がはじめてみずからの富の広がりを測ったこと」であり、その「みずからの富」とは「予期せぬものに到達し、驚異的なものに到達する、人類自身の力のこと」であるといっている。バタイユのいう「予期せぬもの」や「驚異的なもの」は、自身の内面的な葛藤を追究することで出会えるのか、あるいは異境の地を訪れ、地政学的歴史や文化史を探訪することで出会えるのか。いずれにせよ、描いている者自身がその内面に強烈な葛藤や驚異、感情の噴出、知的発見などを追い求めない限り、それらの感覚を他者と交感すること、「人類自身の力」という根源的な何かを伝えることは困難であるように思われる。

今回審査をさせてもらった「第8回美術作品コンクール」への出品作の多くは、自己を中心に据えた極めて個人的な感情、つまり不安、悦び、葛藤、ノスタルジーなどを視覚化して、画面に定着させたものだ。これは、美術大学の卒業展や公募展の審査などで観察される傾向と基本的に変わりは無い。描くための動機は単純ゆえに明らかなのだが、自身の感情を根底まで掘り下げているわけでもなく、自分の置かれた世界を客観視したものでもない。それはしばしば心象風景や空想世界の描写としても顕われるが、例えばシャガールのような独自の世界観へ昇華させられているわけでもない。あるいは抽象表現主義の画家のように、感情や意識を抽象化したもの、あるいはシュルレアリスムの画家のように無意識の領域を追究したわけでもない。あるいは、ブリューゲルのように、自らを取り囲む環境や社会を俯瞰し、それを風刺的な視点で描いたものでもない。あるいは伝統的な西洋の肖像画にあるように権威や権力、宗教的畏敬の念など見えない力が表現されているわけでもない。もちろん絵を描くために美術史の知識が無ければならないというわけではないが、時間によって淘汰されず歴史化されてきた潮流や個々人の表現には、その時代や社会が何らかの形で反映されつつ、時間も空間も超えて、現代のわれわれの心を動かすものがある。題材が個人の問題であったとしてもその感情や自身の立ち位置を多角的に掘り下げ、究極まで追い込み、可能性に挑戦することで、初めてそれは他者の心にも〝烈しい内密の感動を呼び覚ます〟のではないだろうか。コンクールの総評としては、こうした追究や挑戦といった姿勢に物足りなさを感じざるを得なかった。

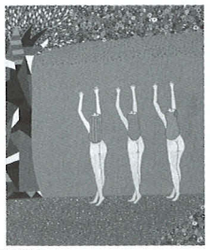
そのなかで、最優秀賞受賞作《白樺が描く》（上村菜々子）は、一見凡庸な雪山の風景のようでいて、モノクロームに限定した色彩や繊細な画面構成に、何らかの内的葛藤を経た抽象化が観られ、そこに独自の世界観の萌芽が感じられた。作品のスケール感も重要な要素のひとつだったといえる。また、優秀賞に選んだ《水底（みなそこ）》（小松サヤ）では、雑誌や広告などの切り抜きによるコラージュから描き起こすという制作のプロセスの重層性、魚類が折り重なる触覚的なグロテスクさの視覚化に、尋常さを越えた何かを見た。一方の《世界は光に満ちみちて》（内田八重）は、西洋絵画の正統な遠近法に依らない画法が、クリムトの絵画にみる鮮やかな装飾性、世界各地のアボリジナル絵画に見られる感性の交感などを連想させ、さらに究極を追い求めることで何らかの地平へ到達する可能性があるように思えた。

いずれにせよ、ラスコーの壁画以来、人類の歴史のなかで夥しい数の絵画が世界中で描かれ、今日もまた夥しい数の視覚イメージにわれわれの環境は溢れている。そのなかで、新しく一枚の絵を描き、それを公開することを特別な体験にするためには、自分自身を内面の奥深くまで見つめ、世界を隅々まで想像しながら、「何のために絵を描いているのか？」を常に問い続ける必要があるのではないだろうか。

第8回美術作品コンクール　受賞作品



最優秀賞
「白樺が描く」　上村菜々子



優秀賞
「世界は光に満ちみちて」
内田八重

優秀賞
「水底」　小松サヤ

かたおか　まみ

一九六五年　愛知県生まれ
森美術館チーフ・キュレーター。東京オペラシティアートギャラリー、チーフ・キュレーターを経て二〇〇三年より現職。その他、アジアの現代美術を中心に、館外での企画、講演、執筆等多数。

蓮の音コンサートを終えて

山崎　美佐子

「和魂洋才」

これは、日本古来の精神を大切にしつつ西洋の技術を受け入れ、両者の調和を求めるという意味である。このよく知られた、たった四文字の言葉について今一度考え直すことが求められていると思う。なぜなら、「洋才」は日本中に広がっているが、肝心の「和魂」はだんだんと消えていっているように感じられるからである。日本には、日本人が自らの風土の中で育ててきた、これからの時代を生きていくために必要な心があると思う。

平成二十五年二月十六日香南市のマリンホールにて、恵日寺の文化財保護のために「蓮の音コンサート」を開催した。六百人以上の方にお越しいただき、立ち見がでるほどの大盛況であった。マリンホールという大きな家で、演奏者と私たちスタッフが、またご来場いただいた小さなお子様からご年配の方まで、三世代の大家族が集まり同じ時を過ごす。楽しく、いたわりながら、本当に優しい空間であった。

ここに至るまでには、まず、平成二十三年の秋に龍河洞スカイラインをドライブしている際、恵日寺に偶然立ち寄ったことから始まった。その時、お寺は全体をハウス用のビニール等で巻かれており、ビニール自体も茶色や緑色に変色していた。随分長い年月放置されていたことは一目瞭然であった。

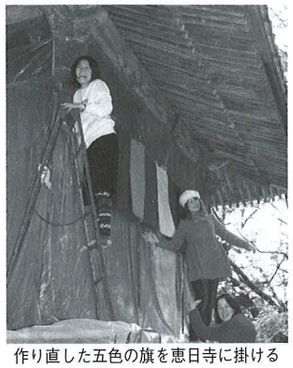
後日、気になり調べたところ、恵日寺は千二百三十年前に行基が聖武天皇の勅命を受けて建立し、平安時代には弘法大師が来山したとされ、大変由緒あるお寺であった。さらに、御本尊になっている十一面観音立像と大日如来の金剛界・胎蔵界の三体は国の重要文化財でもある。

このことを地元の友人達に伝えて恵日寺の状況を見てもらった結果、国の重要文化財が三体もある恵日寺を県や市に保護してもらいたいということになった。そこで、私たちはさっそく市や教育委員会に掛け合ったが全く耳を傾けてはくれず、思案している中、平成二十四年三月に仏像四体が盗難に遭ってしまった。しかし、仏像は奇跡的に戻った。

そこで、戻ってきた高知県の文化財のために自分達に何が出来るかを考え、今度こそ文化財を守り環境を整備したいと思った。まず、参拝者を増やすために恵日寺を明るいイメージにすることを課題とし、境内の掃除をしたり、外すのも大変なほどに古くなった五色の旗を作り直して掛けたり、一言地蔵のエプロンや帽子を新調したりした。同時に、文化財について調べ県庁を訪ねたりもした。また、年末には住職の許可を得て立ち会いのもと、二日間にわたって大掃除をした。

そんな時、東京の友人から不思議な音のコンサートに招待され、感動し、これを高知県の文化財保護のチャリティーコンサートとして開けないかと演奏者の友人に相談したところ、「出来るだけのことをしましょう」と協力してくれることになった。私は高知の友人達にこのことを話し、チャリティーコンサートをすることを決め、県や市の皆さんに私たちの想いを形にして見ていただくために、仕事や家庭のことと調整しながら活動を始めた。

高野山の僧侶らもボランティア出演


作り直した五色の旗を恵日寺に掛ける

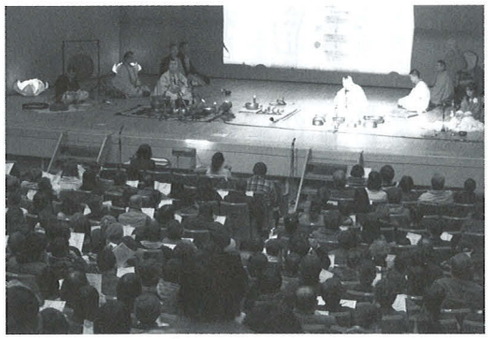
チャリティーコンサートの開催には主に三つの意図があった。

第一に、恵日寺の環境整備のための費用の一部を得ることである。

第二に、文化・歴史・芸術に触れることで参加者に心の余裕を持ってもらうことである。マリンホールで実現した三世代の大家族のような優しい空間というのは、少し前までは地域に普通に存在するものであった。しかし、近年では、日々の生活の糧を得ることに追われながらも前に進むことに精一杯で、自分の周囲の人々に目を向ける心の余裕が失われてしまった。さらにこのことが、そうした優しい空間までも失ってしまったように思われる。そうした今、古い文化等に触れ、すこし立ち止まり過去を振り返ることで得られる心の余裕こそが、地域や社会をより良いものとし、再び前進することをも可能にするのではないかと考えるからである。

第三に、私たちのような地域の住民が、自分たちの想いをチャリティーコンサートとして実現することで、誰もが想いを形にすることができるということ、そして、想いを自分の内にとどめるだけでなく実行することの大切さを伝えることである。たとえ、文化に触れ、心の余裕を取り戻し、より良い方向へと前進したいと多くの人が思うようになったとしても、想うだけではそうした地域や社会は実現しないからである。

きっと、恵日寺が千二百三十年前に建立された当時、沢山の方々の想いや動力があったことだろう。文化や歴史、また今回のコンサートでは特に音の芸術に触れたことで、コンサートに参加した六百人すべての心や想いが千二百三十年前にタイムスリップし、当時と同じ想いを感じることを可能にしたのではないか。


「蓮の音」チャリティーコンサート

それは、ただ仏像を見たり音楽を聴いたりする感覚を超えて、自身の中に歴史をみることになる。つまり、自国の文化に触れるということは祖父母や両親といった、自分に至るまでの過去に経ち帰ることである。そのことは、自分の未来において問題の壁にぶつかったりつまずいたりした時に、心のよりどころやヒントになるのではないかと思う。これが、自国の文化に触れ、和魂を思い起こすことの意義であると思う。

だからこそ私は、こうした文化財保護の活動を続け、誰もが自分の生まれ育った地域の古い歴史や伝統や芸術に関心を持ち、実際にそれらに触れる機会をつくりたい。さらには、文化や私たちがしてきた活動というバトンを次世代に渡して繋げていくことを目標とするだけでなく、この想いを形にするよう働きかけていきたい。

より良く自分を変え、地域を変えて、高知県から全国に高知県民の持つ心の余裕や熱い心音を発信するために。

※お知らせ

七月七日（日）に高知市潮江天満宮で野外コンサート「星の音」を開催予定です。ぜひ、御来場ください。お問い合わせはこちらまで（080-6377-1429）。

やまさき　みさこ
一九六六年　沖縄県生まれ
蓮の音代表、香南市在住。

第23回

高知出版学術賞を審査して

中内　光昭

二十三回目を迎えた審査会は、本年から、八名の審査委員中三名が「若返り」、新鮮な雰囲気で審査が行われた。そこで改めて話題になったのが、本賞の「学術」の意味である。学術的出版物の「学術色」は、専門の論文から、幅広い読者対象の「入門、啓蒙書」類まで、多種多様であるが、本賞が主に評価するのは、その書籍の学術的価値そのものより、一般読者を学術的に啓蒙する力の有無であろう、というあたりで合意が得られた。そのような観点で、十点の応募作品から、「学術色」の濃淡のバランスも取れた次の三点が選出された。なお、受賞作に順位は付けられていない。

左から吉倉紳一、鈴木堯士、津野倫明、北條正司の各氏

ノリーン・ジョーンズ著
北條正司、松吉明子、エバン・クームズ訳
『北上して松前へ―エゾ地に上陸した豪州捕鯨船―』
（創風社出版）

本書は、十九世紀前半にオーストラリアから日本沿岸に来航した、捕鯨船レディロウエナ号の船長ボーン・ラッセルの航海日誌と、遅れて渡来したイーモント号の記録を主要な史料として、豪州人で、日本文化研究家のノリーン・ジョーンズが記したものである。翻訳は高知大学教授北條正司（監修）、松吉明子（同大学非常勤講師）、エバン・クームズ（英会話スクール講師・オーストラリア出身、元高知大学留学生）の三名による。

レディロウエナ号は、一八三〇年十二月にシドニーを出航し、ブーゲンビル島、南鳥島などを経て、翌年三月に北海道の松前沖に到達している。日本沿岸での操業後、母港に帰ったのは、一八三二年六月のことである。ラッセル船長は、航海中の捕鯨に関する出来事は勿論、接岸した島々での原住民との交流や島の自然、さらに、乗組員の挙動などについても、丁寧な記録を残している。

本書は、十九世紀の豪州船の日本近海での捕鯨活動を生々しく記録した一種の海洋冒険物語でもある。当時のエゾ地での和人とアイヌの関係なども第三者の視点で記録され、貴重な史料と言えよう。また、当時鎖国のため、殆ど知られていなかった南鳥島の自然に関する記録なども貴重なものである（因みに、ダーウインがビーグル号でガラパゴスを訪れたのは、この三年後である）。

豪州捕鯨船の日本近海での操業は、鯨を巡る現在の日豪関係とは、まさに正反対で、本書の出版は、「科学的」と共に、「社会的」にも価値を持つと評価された。

自然な日本語に訳されていて読み易く、優れた教養書と言える。

津野倫明著
『長宗我部氏の研究』
（吉川弘文館）

本研究は、著者が卒業論文以来二十余年にわたり、長宗我部元親ならびに、彼を取り巻く人物や当時の社会について、従来の「定説」にとらわれず、一次史料を丹念に読み解き、長宗我部像に新しい光を当てた意欲的な業績である。

戦国・豊臣期に、四国で勢力を誇った「長宗我部氏」については、一次史料が十分とは言えず、「戦記物語」での記録と混交した歴史記録が「実像」のように、流布されていた。特に本県の場合、指導的な研究者の著書が長宗我部像の基礎になってきた。本研究は、先見を排し、一次史料を丹念に読み解くことにより、新しい長宗我部像を描きだした画期的なものである。

論議は幾つかの問題に焦点を当てて為されている。

長宗我部元親と秀吉との関係、「四国統一」の問題点（阿波、讃岐は不統一）、長宗我部氏の領国支配の手法と、関連して、滝本寺の僧「非有」の役割、朝鮮出兵時の「造船地帯」としての土佐、など興味深い問題を、絡み合った、史料と通説の糸を根気よく解きほぐして、説得力のある説を提出している。

審査委員からは、「土佐の中世史が西日本全体や朝鮮半島にまで及ぶ広大なパースペクティヴの中に位置づけられている」、「史料の渉猟とそれに基づく実証に一貫した研究」などと評価された。

鈴木堯士、吉倉紳一編
『最新・高知の地質　大地が動く物語』
（南の風社）

本書は、二〇一一・二〇一二年に、「高知市民の大学」で開講された、「最近注目されている高知の地質」を基本に編集されたもので、著者十名のうち、九名が高知大学地質学教室関係者である。

高知は、昔から、地質学研究者にとって注目すべき土地であった。

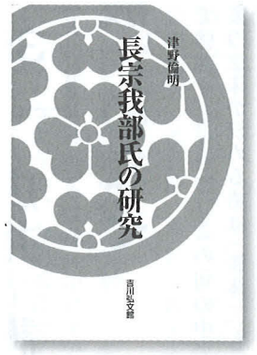
一方、高知大学の地質学教室は、「地の利」を生かし、活潑な研究活動と注目すべき成果で知られてきた。最近になり、東日本大震災や室戸ジオパークとの関連で、県民の地学についての関心は非常に高くなっている。このような事実を背景に、「動く大地」がもたらす様々な地質現象を、その原因と証拠、観察法などを交え、市民に分かり易い解説を試みている。

「室戸ジオパーク」の解説、「付加体」「メランジュ」など聞き慣れない用語の解説、地質関係の「天然記念物」の紹介、原始超大陸の「ゴンドワナ大陸」の挙動など学術的内容に加え、鉄道に乗って、地質の鑑賞や研修をする方法も紹介している。

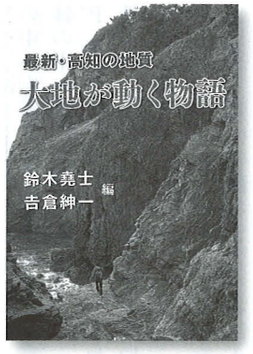
「動かざること大地の如し」とは古い諺であるが、「巨大な地質現象の原因は大地の動きにある」というのが、現代地質学の基礎にある重要な視点である。「移動するプレート」により、地上の地層、岩石の状態は変化する。このような、「移動の証拠」をもとに、大地の挙動を知ることができるのであるが、そのような「証拠」を、多く容易に見られるのが本県であるのは嬉しい事実である。

著者により「わかり易さ」にばらつきがあることや、「索引」が無いことなど、若干の問題点も指摘されたが、社会的要請と研究活動が噛み合った有意義な出版物であると評価された。

『北上して松前へ
―エゾ地に上陸した豪州捕鯨船―』



『長宗我部氏の研究』



『最新・高知の地質　大地が動く物語』

なかうち　みつあき
一九三〇年　静岡県掛川生まれ
（本籍高知市）
高知大学理学部教授、高知大学長を二期歴任後、現在は、高知大学名誉教授。第二十三回高知出版学術賞審査委員長。専門は発生生物学。著書に「ホヤの生物学」（東大出版会）、「ＤＮＡがわかる本」（岩波書店）など。

言葉の現場から 39

「鉄鉢の中へも霰」のなぞ

広井　護

種田山頭火に次の句がある。

鉄鉢の中へも霰

「鉄鉢」は「てっぱつ」、「霰」は「あられ」と読む。わずか七文字の自由律俳句だが、深遠で難解な作品である。今回は、この句の読み取りの授業を紹介したい。

言葉の裏の意味を読みとるには前提がある。まず、語句の辞書的な意味を正確に把握することだ。この句では「鉄鉢」が重要である。

「鉄鉢」は単なる「鉄の鉢」ではなく、修行僧が乞食（こつじき）＝托鉢（たくはつ）に用いる道具だ。「乞食（こつじき）」は、仏道修行である。人の恵みを受けながら旅をすることで、高い心の境地を求める修行だ。

「乞食（こつじき）」という語は、「乞食（こつじき）」から生まれたと言われている。だが両者の意味は、明確に異なる。これは授業の山場でポイントになるので、語句指導で強調する。さて、この句の中で裏の意味が読める語は「鉄鉢」「も」「霰」の三つである。

以下、Tは私、Pは生徒である。

〈「霰」を読む。〉

T「では、読みやすいものから読んでいこう。『霰』から何が読める。霰が降るのはいつ？」

P「冬。」

T「そうだね。でも、読めるのは時だけじゃない。まだ読めることがあるよ。何？」

P「場所。」

T「霰が降っているんだから家の中じゃないよね。どこですか？」

P「戸外。」

T「時と場を重ねると『冬の戸外』だと読めるね。『冬の戸外』ってどんなところ？」

P「寒い。」P「冷たい。」

〈「鉄鉢」を読む。〉

T「次は『鉄鉢』を読む。鉄鉢を持っているのは誰？」

P「修行僧。」P「托鉢僧。」

P「乞食（こつじき）僧。」

〈「も」を読む。〉

T「では、『も』を読もう。『鉄鉢の中へも霰』と、『も』のない『鉄鉢の中へ霰』とは、どう違う？」

P「『鉄鉢の中へも』と言ったら、鉄鉢の中以外にも、霰が降っている感じがする。」

T「たとえば？」

P「道にも……。」

T「そう。道にも霰が降っている。他には？」

P「田んぼにも。」

T「そう、田んぼにも霰が降っている。」

P「屋根にも。」

P「庭にも。」

P「電信柱にも。」

P「体にも。」

T「体には何を着ている？」

P「服。」P「袈裟。」P「蓑。」

T「だから蓑にも霰が降っている。もうない？ 外面的なものはいっぱい出たね。内面的には読めない？」

P「心にも霰……。」

T「いいですね。心の中にも冷たい霰が降っている。

ここまでをまとめます。あたりには、一面に霰が降っている。庭にも、道にも、田んぼにも。…体にも、顔にも、そして心の中にまで…。」

〈主発問〉

T「では、ここで聞きたい。なぜ『心にも霰』じゃないんですか。あるいはなぜ『顔にも霰』『屋根にも霰』じゃないんですか。なぜ『鉄鉢の中』でないといけないんですか？」

P「……。」（答えられない。）

T「いきなりは難しいね。でも、こういうことは言える。他のものではだめだ。鉄鉢でないといけない。他のものと比べて、話者は鉄鉢に強いこだわりを持っている。どういうこだわりですか？」

P「……。」（答えられない。）

〈再び「鉄鉢」を読む。〉

T「違う方向から考えてみよう。話者は、どうして鉄鉢の中に霰が入ったことに気がついたの？」

P「見たから。」

T「そうかな、この人は修行層だよ。修行層が鉄鉢をしげしげと見つめながら托鉢して歩くかな。『入るかな、入るかな、入ったぁ。』ではマンガになってしまう。目で見たからじゃないだろう。」

P「音でわかった。」

T「そう。鉄鉢の中に霰が入ったときの音だよね。音でわかった。その可能性が高い。ところでそれ、どんな音ですか？ 擬音語で言うと？」

P「コン。」P「キン。」

P「コロコロ。」P「カラカラ。」

T「つまり、どんな音？」

P「小さい。」P「かわいい。」

T「霰は氷ですよ。鉄鉢は鉄ですよ。それが触れ合うんだから？」

P「冷たい音。」P「鋭い音。」

P「冴えた音。」

T「冷たく冴えた鋭い音だね。ところで音でわかったってことは、この鉄鉢はどんな状態？」

P「空っぽ。」P「何も入ってない。」

T「そう。だから音が響いたんだ。するとその音は、たんに冷たく冴えた音というだけじゃないね。どんな音？ 空っぽであることがわかる音だよ。」

P「むなしい音。」

T「そうだね。難しく言えば『虚無の音』だ。さて、それをふまえて『鉄鉢への話者のこだわり』を読み解こう。鉄鉢って、何を受けるもの？」

P「ほどこし。」P「お布施。」

P「恵み。」

T「では、鉄鉢の中に霰しか入らなかったってことは？」

P「お布施がない。」P「ほどこしがない。」P「恵みがない。」

T「内面的に読めば？」

P「恵みを受ける鉄鉢にまで冷たい霰が降っている。」

T「そう、非情な霰だね。そのときの気持ちを一言で言えば？」

P「暗い。」P「つらい。」

P「絶望的。」

T「まとめます。道にも庭にも霰が降っている。屋根にも蓑にも笠にも顔にも心にも霰が降っている。そして恵みを受ける鉄鉢の中にまで非情な霰が降っている。…つらい。」

〈マイナスからプラスへ。〉

T「ここまでの読みは、これでいい。間違いじゃないよ。でも、これで終わってしまったら、これは『物乞い』の句になってしまうよ。今日の恵みは何もなかったという嘆きの句だ。すると、『鉄鉢』という言葉の意味がなくなるよ。乞食（こじき）だったら、持ち物は普通の「お鉢」でもかまわないわけだから……。でも、この句の核心は『鉄鉢』という言葉にある。『鉄鉢』から読み取れる人物は『乞食（こつじき）』ではなく、『乞食（こつじき）僧』だ。『鉄鉢』は乞食（こつじき）僧の修行の道具だ。それを踏まえると主題が読めてくる。

さっきは、『鉄鉢の中へも…』を『人の恵みを受ける鉄鉢の中にまで…』というように、否定的にマイナスに読んだ。けれど、肯定的にプラスに読み直すことはできないか。鉄鉢って、何を受けるものですか？」

P「恵み。」

T「その鉄鉢で受けているんだからこの霰は、肯定的に言えば何だと考えられる？」

P「……恵み。」

T「そのとおり。霰は恵みなんだ。そうとも考えられる。どんな恵みですか？」

P「……。」（答えられない。）

T「問い方を変えよう。誰からの恵みですか？」

P「……天。」

P「……自然。」

T「そう読めば、『霰』のイメージが反転する。マイナスからプラスへ。『非情な霰』から『恵みとしての霰』へ。この反転がこの句の主題です。でも、『恵みとしての霰』ってどういうことですか？」

P「……。」（答えられない。）

T「具体的な霰じゃないね。霰の冷たさ、霰の非情さをどう考えることによって、天からの恵みと受けとめられるの？」

P「いい試練。」P「愛の鞭。」

〈主題を読む。〉

T「最終的なまとめです。道にも庭にも霰が降っている。屋根にも蓑にも笠にも顔にも心にも霰が降っている。そして恵みを受けるための鉄鉢の中にまで、非情な霰が入ってくる。……だがこの試練を私は、天からの恵みとして受けよう。この『とっさの覚悟』が主題です。まとめると『非情な試練をも天からの恵みとして受けようとする仏道修行者の心の境地』ということになるかな。

もう一つ。話者は考えに考えた末にそういう結論に達したのではなく、瞬間的にそう思ったのです。仏道修行の中で、一瞬にして深い認識が開けることがある。それを何という？」

P「悟り。」

T「そう。この句は一種の悟りの境地を表現している。鉄鉢の中ではじける霰の音を聞いた瞬間、話者の心にひらめいた『生きる覚悟』のようなものが、その一刹那にとらえられている。『生の淋しさ』と『その生をつつむ大自然への畏敬の念』が、ほのかなユーモアの中に溶けこんでいる世界だね。凄い句だよね。」

ひろい　まもる

一九五四年　高知市生まれ
早稲田大学第一文学部日本文学科卒業後、私立土佐中高等学校に勤務。国語の教師。

高知市文化振興事業団

2月～3月の事業から

高知演劇ネットワーク演会 合同公演「雨かしら」
「劇場で遊ぼう！」ワークショップ
南河内万歳一座「お馬鹿屋敷」

高知市文化プラザかるぽーと小ホールにおいて、演劇公演二本とワークショップを連続で行いました。

最初に行ったのは二月十・十一日に開催した「雨かしら」という作品です。

この公演は、高知で活動をする劇団により組織された高知演劇ネットワーク演会との協働制作で行われ、舞台制作・出演は演会の選抜メンバーが集結。作・演出は読売演劇大賞・優秀演出家賞や文化庁芸術祭優秀賞を受賞するなど関西演劇界の第一線で活躍する一方、多くのワークショップや高校演劇の指導などで高知と縁深い、南河内万歳一座座長・内藤裕敬氏を迎えました。

作品のテーマは「コミュニケーションとディスコミュニケーション」。

どんな厳しい状況にもかかわらず、芝居を続けていこうと苦しみもがく劇団、そしてバラバラになりながらも関係を繋ごうと努力する家族という構図を劇中劇の形で表現しました。

公演に向けた稽古は十月末より始まりました。基礎訓練や稽古の進め方、戯曲の解釈など、それぞれが普段自分たちの劇団で行う稽古とは勝手が違う中で試行錯誤を繰り返し、少しずつお互いの関係性を築きあげました。「良い作品を創ろう」という目標の下、本番に向かって進むという、劇中劇の内容を地で行く制作過程となりました。

「雨かしら」の一場面

公演当日は三公演とも満員のお客様にお越しいただき、多くの方に高い評価をいただきました。

続いて二月十三日に開催したのは「劇場で遊ぼう！」と題したワークショップです。こちらは昨年十二月に北九州芸術劇場にて行われた「リージョナルシアター」という研修事業に高知の表現者五名と劇場制作者が参加し、創り上げたワークショップです。

照明や音響といった劇場ならではの仕掛けを使って、参加したこどもたちの創造力を拡げてもらうことを目的に行いました。

最後に行われたのは二月十六・十七日に開催した南河内万歳一座「お馬鹿屋敷」。「雨かしら」の作・演出を務めた内藤さん率いる関西小劇場界屈指の劇団の公演です。

地域コミュニティの断絶というテーマを、時にばかばかしく、時に内面をえぐるような深い演出で表現し、演劇の奥深さを実感する作品となりました。

「劇場で遊ぼう！」ワークショップ

また、本公演の開催にあたり、高知演劇ネットワーク演会のメンバーが仕込みから本番、バラシ（撤去）、打ち上げに至るまで大挙して参加し、演劇人同士の深い交流を持てたことも大きな成果となりました。

〈入場者数
「雨かしら」三百七十九名
「劇場で遊ぼう！」ワークショップ十七名
「お馬鹿屋敷」二百二十三名〉。

◆平成二十四年度公共ホール音楽活性化支援事業――
「神谷未穂ヴァイオリンコンサート」

二〇一三年三月七日（木）～九日（土）の三日間、仙台フィルハーモニー管弦楽団でコンサートマスターを務めるヴァイオリニスト神谷未穂さんと、フランスのランス国立地方コンセルヴァトワールで教師を務めるピアニスト望月優芽子さんが、二日間の地域交流プログラムと、高知市文化プラザかるぽーと大ホールでのコンサートを行いました。

まず、最初に訪れたのは布師田小学校。はじめ緊張していた児童たちもヴァイオリンを実際に触るなどするうちに徐々に和やかな雰囲気になり、最後の質問コーナーでは多くの児童が手を上げていました。

その後、「龍馬伝」幕末志士社中に場所を移し、一般公募で集まった約五十名の前でミニコンサートを開催。照明を落とした和の佇まいにクラシックの音色を響かせる新鮮且つ特別な一夜となりました。

翌日訪れた追手前小学校では、数週間後に閉校を迎え無くなってしまう校歌をアーティストが演奏し、その伴奏で児童が熱唱。お互いに感慨深いものを感じていました。

その後、高知丸の内高校音楽科の皆さんの前で演奏会と講演会を実施。終了後も熱心な生徒が続々と控室を訪れ、精神論や技法的な質問をぶつけていました。

「龍馬伝」幕末志士社中ミニコンサート

こうして、多くの人との交流ののち、かるぽーと大ホールでコンサートを開催。開演までの間実施したヴァイオリン体験コーナーは、子どもだけでなく大人にも大人気。本来、未就学児不可のことが多いクラシックコンサートですが、今回は小さなお子さんや保護者の方にも楽しんでもらいたいという意向で実施した結果、「集中できなかった」等のご指摘を受けながらも、「子連れで質の高いものを安価で聞けるイベントは大変ありがたい」等のご支持もいただきました。

〈入場者数・六百二十三名〉。

第29回写真コンテスト
「高知を撮る」入選作品展

写真コンテスト「高知を撮る」の入選作品展を、三月十九日～二十四日、高知市文化プラザかるぽーと市民ギャラリー第四展示室で開催しました。初日は午前十時より表彰式が行われ、入賞者には賞状と賞金が授与されました。その後、今回審査にあたった審査委員会を代表して、高知新聞社写真部の土居部長より作品講評をいただきました。

今回は「記録写真部門」と「ＩＬＯＶＥ高知部門」の二部門に、合わせて県内外の九十七名の方から二百九十六点のご応募をいただきました。これらの作品に対し、報道関係者・学識経験者による審査を行い、両部門合わせて特選四点、準特選十九点を含む、入選作品六十八点を選出しました。会場にはこれらの入選作品を展示し、期間中千十七名の方にご鑑賞いただきました。高知の懐かしい風景や出来事、人々の暮らしを記録した写真を熱心に見入る鑑賞者の姿が多く見られ、昭和時代に撮影された写真を見て、古き良き時代を振り返りながら話に花を咲かせる光景も見うけられました。

〈入場者数・千十七名〉。

高知を撮る

第29回写真コンテスト入賞作品

春の町角

（昭和43年４月　香我美町岸本）

貞岡　喜朗

夢

風俗歳時記

株式会社トップアスリートが調査した「十三歳のハローワーク」によると、将来なりたい職業一位はプロスポーツ選手。二位はナニー。「ナニーって何」と思わず突っ込みが入りそうだが、ナニーとはしつけと教育の付加価値のついたベビーシッターのようなものらしい。いずれも、何のしがらみのない子どもだからこそ語れる職業のように思う。

将来の夢が具体化するのは、思春期頃だろうか。本当になりたい夢を職業にして生活できるかという現実に直面し、夢が萎んで行くこともある。

先日、高知市内の小学校の閉校記念式に、パーカッション奏者の一行がやってきた。四国での公演は初めてということで、評判を聞きつけた吹奏楽部の生徒や学校ＯＢ・ＯＧが大勢詰めかけ、マリンバやスネアドラムの美しく軽快な音色に耳を傾けた。この団体を主宰する男性とマリンバ奏者の女性は夫婦。息の合った情緒豊かな表現に、会場からはブラボーの声も。ピアノやリコーダーなどと比べ、演奏する機会の少ない楽器のプロ奏者になろうと思ったのはいつなのだろう…そんな素朴な疑問を、主宰の男性にぶつけてみた。「高校で吹奏楽部だったのですが、その時にマリンバに出会ったのがきっかけで音大に進みました。そこで出会ったのが今の妻。世の中にこんなに魅力的にマリンバを奏でる人がいるんだと感服し、プロとして一緒に続けてきました」とさらりと話してくれた。夢との出会いが意外と遅く、生活の安定や定住ということを考えると、なかなかすぐには選べない職業だが、「演奏家として生きる」という強い気持ちが伝わってきた。

夢や理想と現実との狭間で押しつぶされそうになっている人も多い。春は、出会いの季節。新たに得た知識や人脈が、将来を左右することもある。納得が行くまで夢を追い続けられる人生はそれだけで幸せだ。

（立花香）

富士通コンコード ジャズ フェスティバル 2013

ジャズ・アット・ザ・フィルハーモニック

日本が誇るジャズの祭典をかるぽーとにて開催。総勢13名のトップ・ジャズメン達による、極上のオールスター・ジャムセッションをお楽しみください。

【出演】
ジェフ・ハミルトン(ds)／タミール・ヘンデルマン(p)／クリストフ・ルティ(b)
ルイス・ナッシュ(ds)／リニー・ロスネス(p) ／ピーター・ワシントン(b)
ランディ・ブレッカー(tp)／テレル・スタッフォード(tp)／ハリー・アレン(ts)
グラント・スチュワート(ts)／チャールズ・マクファーソン(as)／多田誠司(as)
ロバータ・ガンバリーニ(vo)

日時：6月7日(金) 18:30開演
会場：高知市文化プラザかるぽーと大ホール
料金：全席自由 4,200円

■お問い合わせ　高知市文化振興事業団　088-883-5071

宝くじ文化公演

仲道郁代×内藤裕敬 共同企画「窓の彼方へ」

世界的ピアニスト仲道郁代演奏によるショパン楽曲と、南河内万歳一座 内藤裕敬が描く、音楽が語り、せりふが歌うお芝居。
観て聴くショパン！音楽とコトバが溶け合う魅惑の体験をお楽しみください。

【あらすじ】
ある部屋の大きな窓とピアノ。
不動産屋に案内された客が、大きなピアノを演奏し始めると、そこは、引っ越ししようとする女の部屋か、大きな窓から見えるお向かいの屋上の洗濯場での風景か、それとも、以前ここで暮らした老人の人生か、ショパンの曲にいざなわれ、色鮮やかな風景が繰り出されます。

日時：7月11日(木) 18:30開演
会場：高知市文化プラザかるぽーと大ホール
料金：全席自由
　一般前売り2,000円（当日2,500円）
　高校生以下前売り1,000円（当日1,500円）

■お問い合わせ
高知市文化振興事業団　088-883-5071

風伯

密かにきのこを

きのこ狩りに熱中している友人がいる。秋になるとゴルフの付き合いよりも、きのこ狩りに出かけて行く。彼にいわせると、自然にどっぷりと浸りながら身体を動かし、見て楽しく食べて美味しいのが、抗しがたい「きのこ観察」の魅力なのだそうだ。

山に入ると、私も幾度となくきのこを目にし、持って帰ることもあった。が、なかなか食べる勇気が出ない。図鑑を調べても似ているようでもあり、違うようでもある。毒かどうかが紙一重のきのこも多く、自信をもってこうだと決められないのがきのこの難しいところである。しかも毒きのこに当たって死ぬこともある、などと聞かされると、この世界に素直に入っていけない。

友人にいわせると、某氏のつくる「きのこ汁」をいちど食べて以来、それにつられてきのこ観察会に出かけるのだそうだ。きのこに取り憑かれる羽目になった某氏に先日会った。その某氏でさえ、「ひとりで図鑑を眺めていても、きのこの同定（これはこのきのこだと決めること）はなかなかできなかった」。何人かの同好の士で「ああでもない、こうでもない」とやっていると、同定できるようになるのだという。

えっ！まさか。多数決で決めるわけではないだろう。結局は年季の入った某氏のようなベテランに「これはシカジカのきのこだ」といってもらうから、他の同好の士も安心して「きのこ汁」に舌鼓を打つのだろう。

毒きのこかそうでないかを自分で決められない紙一重のきのこに、そうまでして味わう「きのこ汁」には、いったいどんな魅力が隠されているのだろう。

やっぱり、いちどは食してみたいものだ。

（霖）

今号の表紙

「梅の実」

黒岩　亜美

梅の実を収穫する時期ですね。
おばあちゃん家の山で梅の収穫をしたことを思い出します。
収穫した梅を梅干しにしたりお酒にしたり。そんなことを思い出しながら一つ一つ梅を描きました。
（くろいわ　あみ／
国際デザイン・ビューティカレッジ２年生）

文化高知 No.173 2013年(平成25年) 5月1日発行 [隔月発行]

公益財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5071/郵便振替01680-5-14869

http://www.kfca.jp e-mail kikaku@kfca.jp